

C.A.T.の20年

1975-1995

Japanese Edition

編訳

国際AI財団

内村 雅生

C.A.T.(The Centre for Alternative Technology)は、地球環境と文明社会の調和を目標とする人々の実験生活共同体として英国ウェールズの片田舎に誕生した。当初は変わり者の集団の様に見られていたが、今日では、エコロジーとサステナビリティをテーマとする屋外展示施設として整備され、一般社会に対して様々な情報発信を行うまでに成長した。

この冊子は、創設 20 周年（1995 年）を記念して同センターより刊行された"The C.A.T. Story / Crazy Idealists!"（C.A.T.ストーリー 驚異の先駆者達）の中から、発展史に関する部分（全 22 章の各々に設けられた Meanwhile と題するコラム）を翻訳したものである。

The Centre for Alternative Technology (C.A.T.) was founded in Wales as an experimental community aiming to live more lightly on the earth. Although somebody said that it is a bunch of hippies in pioneer days, now it became the Europe's foremost Eco-Centre.

In 1995, C.A.T. published "The C.A.T. Story / Crazy Idealists" for their 20th anniversary, which is consisted of 22 sections. This booklet is a Japanese translation of "Meanwhile" columns in each of those sections, which express about C.A.T.'s history.

Welcome to the Future 「未来」へようこそ

所長 Roger Kelly

この冊子では過去 20 年について述べていますが、実はその内容は未来そのものと言えましょう。或いは「未来」から何か啓示を受けた数多くの仲間達の物語と申しても良いかも知れません。

彼等は、ボランティアとして、協力労働者として、この施設の生活共同体の一員として、宿泊研修コースの参加者として、日帰りの見学者として、ここにやって来ました。建設や展示物の工作の為にやって来た人もいれば、ただ近所に住んでいるからやって来た人もいるし、ちょっと手伝ってみたいからと言ってやって来た人もいました。

私達は、将来いつの日か、「ああ、ようやく我々の仕事は終わった、ようやくこの世界のサステナビリティは確立した、さあ安心して引退し、努力の成果を享受しよう」と心から言える日を、今まで夢見て来て、今も夢見ています。しかし、彼等多くの仲間達の熱意があるからこそ、その希望を失わずにいられるのです。その熱意には、次の 20 年経った後に私達が残すであろう成果もかなわない事でしょう。

この冊子を、センターの今日の為に努力を傾けて下さった全ての人々に捧げます。

B.C. - Before C.A.T. CAT 創設以前	1	Straw, Stick and Brick	
Founding Spirit 創設理念	1	藁、丸太、煉瓦	11
The Pioneer Days 開拓者達のドラマ	2	Ways of Building CAT の建築作業	12
Creating an Eden 楽園の創造	3	Putting on a Show / Showing How	
I Didn't Mean to Stay!		展示を通じて何を訴えるか	12
労働：未来と自分自身の為に	4	Managing Chaos 混沌の運営体制	13
Watt Value! 電力、節減、叡智	4	Slicing the Cake 収益と分配	14
Techno Wizards 現代のからくり職人	5	Changing Gear / Up a Gear	
Living Here CAT の社会生活	6	ギアチェンジ	15
GWLAD! GWLAD! 我が故郷！	7	Reaching Out	
Growing to Live エコダイエット	8	情報発信基地としての活動	16
Back to the Soil		Evolution この 20 年の発展	17
直線構造から円形構造へ	9	The Spawn CAT の子孫達	18
Better than School		Into Tomorrow 未来に向けて	19
学校では教えられない事	10		

B.C. - Before C.A.T.

CAT創設以前

CAT は夢と現実の理想的な調和である。この夢とは、センターの創設者 Gerard Morgan-Grenville が 70 年代始めに、当時の多くの人々と共通に描いていたものである。則ち、工業文明に対する反感と、それに取って代わる何か革命的な手段を人類の未来の為に模索する事である。この思想潮流は、16 世紀以来の英国の反工業文明志向の一翼を成し、17 世紀の鉱夫や測量技師達、18 世紀のラダイト主義者^{*1} やロマン派詩人、19 世紀の John Ruskin や William Morris の様な社会評論家、などと共に歩んで来たものである。そして 20 世紀半ばに至り、新左翼、反体制派、自然保護団体、世界連邦運動、女性解放運動、平和運動と言った工業社会の危機を訴える運動と歩みを共にする様になった。

これらの運動に共通しているのは、人間疎外を伴う都市化社会への不信である。これに対して、何か新たな選択があるとするなら、それは等身大で、より優しい論理によるべきである。しかし、実際にどうすれば良いのだろうか。批判的な流派は夢ばかり追おうとし、実効性のある回答を自力で創造し得ない理論家は社会の主流と運命を共にするばかりである。

Alternative Technology は、より良い選択の為の現実的具體案として構想された。即ち、様々な文明批判を包含しつつも、科学技術の成果を全て否定するものではなく、科学技術と進歩を共にする事を受け入れる考え方である。そして、最も基本的な価値判断基準は、収支や効率の計算は正しく行い、適正な利益や効果は得るべきだ、と言うものである。この部分こそが、競争社会と Alternative の世界との接点と言えよう。

Alternative Technology の概要については多くの研究者によって解説されているが、中でも、シ

ューマッハの名著「スモールイズビューティフル」^{*2} が注目に値する。Gerard Morgan-Grenville は、そういった研究の成果を具現する立場となったのである。彼は構想を実現する決意を固め、Llwyngwern 採石場がその場所となった。

この採石場は、19 世紀中頃より、建物、暖炉、ビリヤード台、墓石などに使われるスレートを産出しており、地域の経済、文化に重要な地位を占めていた。しかし、戦後の経済情勢下で採算性を失い、その上に大事故が重なり、1951 年に閉山した。20 年以上に渡って自然のままに放置された採石場は、絨毯の様な苔や石片がうずたかく岩肌を覆い、更にそれを草や灌木、喬木が覆うと言う有様だった。この土地は地元の Beaumont 家の所有であり、同家ではこの場所の開発を夢見ていた。当主 John Beaumont は、林学を修め、自然とのバランスのとれた農耕やライフスタイルについて鋭い見識を有している。そして Gerard の熱意は、彼の心の琴線に達したのであった。

この冊子の物語はこうして始まる。

Founding Spirit

創設理念

70 年代初頭の英国では、自然保護運動が自身の在り方を巡って動揺を繰り返していた。地球の友を自負する人々は、環境主義と言う革新的な名の下に収束して行った。

革新的な派閥は他にもあった。彼等の思想は、Teddy Goldsmith の下で The Ecologist magazine が作成した "A Blueprint for Survival" とローマクラブの「成長の限界」^{*3} に代表される。

これら諸派は、近代工業社会は、自然の生態系とは根本的に相容れないもので、砂漠化に直面し

*1 the Luddites 反機械化主義者

*2 Fritz Schumacher "Small is Beautiful"

*3 the Club of Rome "The Limits to Growth"

ていると結論付けた。

環境運動に携わる人々の多くは、その様な結論を予想通りのものと思ったが、では何が出来るか、と自問した。そしてその答えは、実現の可否は別にしても、非工業社会の希求であると考えられた。とは言うものの、過酷なストレスに満ちた都会の人々は、この根本的課題に対しては沈黙したまま、自然愛好、古き良き時代の回想、シンプルライフ、大量消費との訣別、と言った活動をするに留まった。ただ、思想そのもののみが輪を広げて行ったのである。

ここで核兵器の脅威が何某か影響している事も忘れてはならない。もし都市に住んでいれば核戦争の際に危機にさらされる可能性が高いが、地方、特に遠い西部地方であれば多少は危険も減るだろう。即ち、多くの人々が丘の連なる田園地帯での平和な生活を求めるのも必然的な事である。しかし、"The Limits to Growth"にある様な啓示的預言が正しいとするなら、現代社会は、核戦争があるまいが、いずれ自滅するのである。

工業インフラストラクチャーに頼らずに誰が社会を再建し得るのだろう。Scattered^{*1} 農場の試みも成功には至らなかったのである。必要とされているのは、生存と市民社会の再構築を可能ならしめる知識と技術を持った意識の高い人材である。

この思想の流れは、更に、やたらと急進的でヒーロイックではないが、大量消費社会を消滅させてしまう様な、魅力的で意識の高いコミュニティの在り方を提起した。そして又、性差別排除運動や反権威主義にも共鳴したのである。

CAT はこうした諸潮流を撚り合わせて誕生した。そしてその歴史は、試行錯誤と既成の現実への反抗を見せ付ける事となる。

初期には、このプロジェクトは雑多な人達によって進められた。そして、そこには創立者 Gerard Morgan-Grenville の高尚な庭園趣味と少々気難しいアカデミズムが共にあった。又、そこ

には、ヒッピー、自治運動家、新原理主義者、そして環境主義的革命家などがあり、皆お馴染の通りマルクス主義に影響されていた。

それらは今も我々と共にある。時に我々は、独特の感慨を持って当時を思い出す。彼等と話したり、当時の文書を読み返したりすれば、組織の活動目的と方法を確立すべく激しく胎動していた時代が、昨日の事の様に思い起こされるものである。

The Pioneer Days 開拓者達のドラマ

何処の場合も同じかも知れないが、これから紹介する初期のメンバー達は死に物狂いで人間臭いドラマを展開した。これは 1974 年から 1975 年の詳細な記録であり、今でも我々の大切な思い出である。

最初の記録者は Tony Williams である。彼は小さな権限と給与を与えられた最初の職員であり、1974 年 2 月に着任した。

幾つかの出来事を反対ページに^{*2} 紹介してあるが、Tony は環境原理主義者とも呼ぶべき考えの持ち主である。彼は、敷地内の生態系を手つかずで残し、その中で人間の方が最低限の初歩的技術で適応する自然のサンクチュアリのような形で維持しようとした。この様な考え方は CAT の開拓に於て常に重要であったが、一般社会の場合と同じく、いつも進歩の名の下に退けられてきた。

二ヶ月を経ずして Tony は去り、代わって Mark & Mary Matthews 夫妻がやって来た。彼等は献身的だが、より現実的だった。Mary は 1975 年に至るまで詳細な日記を残している。

この間最も過酷な役割を担ったのは Diana Brass であった。彼女は正規の修行を積んだ料理

*1 Scattered family farms 当時、各地に登場した自営農場。いずれも規模が小さく、現実社会とかけ離れた存在だったので影響力を持てなかった。

*2 原典では、当時の関係者の回想等が収録されている。

人であったが、幸か不幸かその能力を不揃いで粗悪で乏しい食材を巧みに活用する事に費やさざるを得ず、口の悪い者は当時の食事を「オーツ麦の饗宴」などと呼んだものである。彼女こそはこの時期の寡黙なヒロインであり、あらゆる要望を一手に引き受け、巧くとりまとめ、何の報償をも求めなかったのである。

1974年にはエジンバラ公がセンターを訪れる事になったが、それを巡って内部に深刻な対立が生じた。前衛的な者達は、太平を謳歌する一般社会との隔絶を望み、体制に媚び諂う事はCATそのものの墮落だと主張した。特に彼等は、訪問を受ける為に慌てて施設を飾り立てる事に強い怒りを覚えたのである。しかし、プリンス達も他の人々も決してリアリティを求めているわけではなく、ショーを見せてやれば良いのだった。何年も経るに従って、我々は、自分達の仕事の大半はショービジネスの様なものだとしきり切って考える事ができるようになった。

一方、公爵訪問程の様な派手な打ち上げ花火ではないが、何人かの専門家達がやって来て関与するようになった。

Bob & Liz Todd 夫妻は1974年に来訪し、1975年には幼い子供と共に住み着いた。Bobは世界に通用する電気技師であり、複雑な機器の設置も行えるし、物事を学問的に、しかも解り易く説明できる人である。そして彼は、センターの支払い問題にも奔走し、「信用」と言う貴重な財産を与えてくれたのである。

1975年、Mark Matthewsに代わり、カリスマ的指導力を持ったRod Jamesがやって来た。彼はセンターで最初の公共棟を造った建築家であると同時に、むしろCATそのものを原初的レベルから脱皮させ、発展期を画した人として銘記される。

ここに紹介した人達についてだけでもまだ話は尽きないが、CATは今も一流の知恵と技術の持ち主達を惹き付ける存在であり、キャリアアップの保証と惜しみない待遇を以て彼等を迎えている。

Creating an Eden 楽園の創造

1994年、反対運動家達は、HampshireのTwyford Downの道路建設阻止に失敗した^{*1}。他方、開発業者への抗議行動が功を奏し、ロンドンのOxleas Woodを守る事が出来た。しかし、常にこの様な二元対立しかあり得ないのだろうか。

我々は生存し、移動し、食糧や燃料や製品を生産しなくてはならない。又、そう言った活動から生じる廃棄物を処理して行かなくてはならない。果たして、現代生活とは根本的に自然界に対して謙虚なものと言えるだろうか。では、だからと言って、自然界に対して一切の開発を放棄し、その脅威のなすがままになるべきなのか。

当初我々は同じ問題に直面した。CATの敷地には誰もが認める美しい、手つかずの自然があったからである。しかしCATの目的の為にそれは計画的に開発する必要があった。

我々はどう考えたか。この敷地自体が手がかりを与えてくれた。そもそもこの自然は乱暴な採掘とその後の放置の結果なのである。もし今、昔の様な方法での採掘を行おうとすれば環境保護運動の猛反発を食らう事であろう。しかし1974年の当時の採掘場跡が周囲の農地よりもずっと自然に溢れていた様に、自然は自力で回復し得るものである。我々は居住の為に最低限の開拓を行う事にした。自然破壊はしないに越した事はないが、何処の自然環境も時には別の自然の力で破壊される事があり、又回復力も持っているのである。更に敷地には元々草が生えておらず、土がないと言う特殊な条件も、そう考える理由となった。

一方、我々は見学者に有機農法の優れている事をデモンストレートする為にも食糧を生産したかったのである。その為に我々は有機物のリサイクルに取り組み、板切れや廃水も取り込んだ。但し、これはいずれも我々の敷地内で発生した物だけを原料として肥料を作るのである。但し、敷地の殆どの部分は施肥しておらず、「手つかずの自然」

*1 過激な反対運動で民心が離反した。

を守っている。また、言うまでもない事だが、残りの部分にも化学物質は一切使用していない。

我々は一応の構造を完成したが、常に環境の観点から予後を見つめている。それらは自然への影響を最小限にし得たか。それらは新しい住人を養い得ているだろうか。

例えば、1990年に、水力ケーブルカーの為に新しい貯水池が必要になった。これには地表の掘削が必要になるが、同時に水辺の生態系を育む機会でもある。

如何なる地理的条件も人間にとっては利用可能であり、あらゆる自然の仕組は人間にとって有効なものであり、全ての仕組や仕掛は人間にとって便利で、同時に自然に適合したものでなくてはならない。これこそが我々の開発の根本理念である。

家屋にも、事務所にも、会議室にも、通風ダクトにも、温室にも、壁にも、風車にも、廊下にも、電話ボックスにも、皆仕組や仕掛があり、我々は日々それを利用している。自然界でも、年々輪廻が繰り返され、有機的に機能しているのである。このような営みこそが、人間の活動や自然界をして、厳密な適者生存のみではなく、豊富な相補関係を可能にしているのである。

I Didn't Mean to Stay!

労働：未来と自分自身の為に

労働の在り方は大きく変わった。いつまでも同じ勤め先にいる事はできないし、いつまでも働けるわけでもない。あくせくと働く人もいれば、職業のない人もいる。職業を持つ人々にしても、仕事は決して楽しいものではなく、必要に迫られてやっているだけなのではないだろうか。

良い職業とは何だろう。人は高給を得れば更に高給を求める。全て金、これが現実である。この視点に立てば、CATで働く事は職業とは言えない。CATの給与は至って僅かなものだし、勤務評定などと言うものもなく、皆同じ待遇である。それでも多くの職員が長年に渡って勤続している

のはなぜだろうか。

CATでの労働の報酬は既存の尺度では測り得ないものである。最初、この組織体では全てのメンバーが全ての事に関与し合った。そして我々は各々がそこで如何に寄与できるかに誇りと喜びを見出した。CATが目指すものの重要さと荘厳さが一般社会に影響を及ぼす事を我々は期待している。CATは個々人の奉仕的労働の価値を増幅する媒体なのである。それは中世の巨大な教会建設に従事した職人が、自らの為ではなく未来の為に働いたのと同じである。

労働には色々な分野があるが、いずれも本質的に手と頭と心の働きを組み合わせたものである。個人にも組織にもその労働パターンを自在に構築する受容力があり、日々の労働の中には能力開発や新しい経験の機会が豊富に秘められている。CATの多くの職員は、当初の部門から別な部門へと移り、センター側の指導と助言で新しい専門分野の道を歩み始める者もいる。所与の条件に対しては、それを否定するのではなく、活かす事を考えるべきであり、夏に夏らしく晴天が続けばそれだけで極楽と言うものである。我々は適切な計画と技術を以て所与の環境を快適なものに変える事ができた。

CATで働く者は様々なきっかけでやって来る。多くの者はボランティアとしてやって来るが、全国紙の広告を見て高倍率を突破して来る者もいる。人材採用の基準は、経歴や肩書ではなく、実務能力や、創造力や、柔軟性である。

労働とは、たとえ報酬が少なかりとも、それが人生の多くの時間を占めるものである以上、充実したものであるべきである。我々は日々それを淡々と実践している。

Watt Value!

電力、節減、叡智

エネルギーの世界では、偉大にして緩やかな革命が進行している。それは魔法の様な新発明でも

なければ、既存技術の焼き直しでもない。それは単純で緩慢な進歩ではあるが、どの様にエネルギーを起こし、活用するかと言う基本的な態度の変容である。

原子力であろうと、火力であろうと、風力であろうと、水力であろうと、エネルギーの生成とは環境に悪影響を及ぼすものであり、同時に必要不可欠の事である。しかも常に反対運動に直面しているのである。

エネルギーを多様化するのは良い事だが、環境への影響と言う対価の負担については、誰もが人任せにし勝ちである。しかし、誰がそれを請け負うのだろうか。我々はあまりに無責任なのではないだろうか。

50 年以内には、100 億から 200 億人の人々が現在アメリカ人やヨーロッパ人が消費しているのと同じ程度のエネルギーを用いる事態を直視しなくてはならない。お楽しみの時間は終わった。最早議論の余地はなく、結論は只一つ。エネルギーの節約である。1994 年の灯油消費税増率法案の際の大騒ぎを見ても解る様に、省エネルギーとは政治的には嫌われるものである。しかし、エネルギーの専門家は 20 年前から現在に至るまで、その必要性を指摘しているし、CAT でもそれは同じである。

その研究成果は明快に展示されている。即ち、省エネルギーと言う選択をしても、物資の輸送はできるし、新たなエネルギー源を探すよりも、より速く、より安く、技術的に簡単で、環境に優しいのである。

CAT では、係る議論に対して、1977 年の「英国の代替エネルギー」^{*1} の刊行を以て寄与している。当時、エネルギー消費は 19 世紀中葉以来一貫して伸びており、公的なエネルギー開発事業も従来通り継続する事が不可欠とされていた。対照的に我々は明確なポリシーを持った理論を展開していた。即ち、1990 年までには、エネルギー消費は 1970 年当時と同じ程度に抑える事ができる様になり、更に高度なサービスも提供できる様に

なる、と言うものである。そして、結果的に行政側は間違っていたのだが、先方にはエネルギー消費の実態を本気で把握した上での確かなポリシーがあったわけでもなく、我々が勝ったと言うには当たらない。とにかく、この事から、周到な計画があればエネルギー消費は現在の生活水準を維持したまま半分にも四分の一にも削減できると言う我々の確信を更に深める事になったのである。更に、信じ難いかも知れないが、このエネルギー削減は費用の節約をも実現するのである。

具体的な事として、CAT のエネルギー消費は他の同じ程度の利用形態の 30%であり、その半分は再生可能資源から得ている。そして、地球温暖化及び CO2 問題に於て専門家が警告を発しているわけだが、我々は二酸化炭素の排出を 60 % 減少させている。

以前は、エネルギー消費の削減には生活の利便性の低下が避けられないものとされており、たとえ劇的な効果があるとしても、一般には到底受け入れられない事だった。しかし、90 年代に入って、我々のエネルギー供給の品質は一般のものと大差ないものとなった。それは特別に高度というわけではなく、今日では当たり前の技術で、ただ周到な計画管理の下に達成された。やればできるのである。

Techno Wizards

現代のからくり職人

エネルギーの確実で効率的な使用は最も重要な事であるが、そこには、反応がなかなか確認出来ず、根気を要すると言う難しさがある。確かに、燃料消費を十分の一にする為の隙間の目張りよりは、年間を通じて 1000kWh を発電する風車の方が見栄えがする。巧く見学者の興味を引くにはどうすれば良いのだろう。実際に、サーモスタット

*1 1977 "An Alternative Energy Strategy for the United Kingdom"

や隙間の充填素材に比べて発電関係の機材の方が大がかりで高価になり勝ちである。いずれにしても、我々が如何に節約しようとも発電は続けざるを得ない。

CAT では、将来英国の資源が三分の一になった時の姿を考えている。その時には電力として消費する比率が高まって半分以上となり、そして再生可能資源によって発電されている事だろう。それらは国中に分散して設置した数千もの発電機から不規則に供給される筈である。その為に我々は、今以上に全国的な送電網が必要であり、状況に応じて送電も受電も可能にすべきであると考えている。

見学者の多くは我々の自家発電の様子を見て、自分達も電力会社から電気を買う事をやめるべきだと思い込む事が多い様だが、それは間違いである。我々は人々の生活に必要な電力の一部は自給出来る事を実演しているに過ぎない。電力は現行の様に集中して発電し送電した方が経済的で環境への悪影響も少ない。我々のシステムは、化石燃料のバックアップを得た上で、電力の 90 %までを再生可能エネルギーで賄うと言う、一つの未来像を提示しているのである。

初期の CAT には、自給自足を極端に尊重し、電力についても電力会社からの安定供給よりも、とにかく自家発電を求める意見があった。その様なタイプの設備は、グラスゴーやチューリッヒに作られたが、やはりうまく機能しなかった。

その後、我々はより現実的になり、エネルギー混用のシステムがあらゆる条件に最も適応性が高く、ある程度まとまった規模の方が良好な効果を得られると考える様になった。

ところで、我々の電力システムは供給容量に限りがあり、「いつでも好きなだけの電力を」と言う要求を満たさないの、電力会社の規格には適合していない。しかし、最も身近で便利な電気の使い方であるラジオ、テレビ、ビデオ、台所用品など、20 ~ 30 ワット以下しか消費しないものは自由に使える。大電力を要する機械については、

「パワーエチケット」部門の配電担当に内線電話で連絡した上で使用する事になっている。

現実の未来社会では、再生可能資源からの発電状況によって料金変動する様になるのではないだろうか。さしずめ我々なら、電力料金が安い時間帯にのみ洗濯機を動作させる装置^{*1}を開発する事だろう。

Living Here

CATの社会生活

80 年代の半ば、マーガレットサッチャーは「社会などと言うものはない、ただ個人とその家族のみだ」と発言した。しかし、政治家が揃って「社会」と言うものの重要性を高尙に述べ立て、「コミュニティ」を連呼している今日の視点では、サッチャーの考え方は危険でさえる。

70 年代初期には、「コミュニティ」という用語は別な意味を持っていた。即ち、現代社会が失ったものを再構築しようと試みる一群の人々を指す言葉だったのである。その失ったものとは、街路の手入れが行き届き、近隣の人々が仲良く暮らし、夜間でも安心して一人歩きのできる空間の事である。

元来、CAT は外部に開かれてはならず、実験的自立的コミュニティを目指していた。当時は、英国全体に「大地への回帰」を目指すコミュニティが数多くあり、特に珍しいものではなかった。これらは、一般社会からは胡散臭い目で見られ、また、重苦しい悲壮感に包まれた自滅的なものに映ったものである。そうして敬遠された事も自分たちだけで反工業文明を標榜してしまう一因であったかも知れない。

当初 2 ~ 3 年の CAT の実験の中心は、実際に居住する者のコミュニティ創造であり、独立主義的なロマンが漂っていた。何人かの職員は近隣に

*1 英国の一般的な洗濯機は温水供給機能が付いているので大電力を消費する。

家を持って別に住んでいたが、それは少数であった。

そこでは、「労働」と「日常生活」とがひどく混淆していた。日々の作業は職業ではなく勤行^{こんぎょう}であった。また、各人が受け取る金銭は、単なる給与ではなく、惑星地球を守る為の勇敢なる振舞いに対する褒賞であった。

食事、居室、衣服、日用品など、物質面の共有によって、労働と生活との境界は一層曖昧なものとなった。そこには、独特な熱気が溢れていたものである。それは単に組織体を維持せんとする気持ちではなく、食糧を生産し、木を伐り、機を織り、牛の乳を搾り、家を建て、子供達を養い育てる、そう言った高い志であった。そして、他の多くの場合と同じ様に過熱状態に陥り、その継続が困難となったのである。

何の苦労もなく育った世代にとっては、人生など容易なものに見え、生活に必要な物は最初から身の周りに揃っているのが当たり前だったのである。彼等にとっては、工業文明との隔絶は予想以上に厳しいショックであった。工業製品に依存して来た自らの生活はどうする事もできないし、敢えてそれを拒むなら何と身を粉にして働かねばならない事か！

そして、実験的自立的コミュニティを目指そうとする者は、やがて少数派になって行ったのである。

最近では、我々は、自分達の共同体が英国社会に取って代わる様な存在とは考えておらず、英国社会の一部を構成する奉仕的な集団と見なす様になった。生活も嗜好も習慣も伝統的なものに近付きつつあり、むしろ、エコロジカルな住居と適切な互惠制度が目標となっている。

実際に、多くの「オルタネティブ」の研究家が同様の結論に達している。個々の住居、村落、地域社会と言った規模こそがエコロジカルな技術を活かすのに最適なのである。人々は、それぞれの家族と共に独立して居住するが、新しい統治体制の下で、情報ネットワークと公共施設を共有す

る。この新しい統治体制とは、家庭と地方政府との微妙な溝を埋める為にこそ存在するものである。

GWLAD! GWLAD!^{*1}

我が故郷！

「地球的視野で身近な活動を」と言うのが自然保護運動の重要な主張である。では CAT にとってそれはどう言う事なのか。地元といえば、独特の風土や生活を有しているものだが、そもそも CAT は特定の地方の文化に密着したものではない。

どこの土地にも、数百年、数千年のルーツを持つ住人がいるものである。CAT は、その様な伝統的地域社会に敢えて一石を投じる存在であり、何かと困難があるのだが、特有の複雑さを持った地域社会も、その存在意義は CAT が目的とする所と同じである事に気づかされる。

何処にせよ地域社会とは、CAT の遠大な目的が実現した暁には淘汰される立場にあり、その成否が CAT の一つの試練である。しかし 20 年を経て、CAT は依然として地域社会の新参者であり、地方の自然保護団体と言う様な見方をされているに過ぎない。

そうした訳で我々は、日々の仕事に追われている事もあり、地元の^{しがらみ} 柵 を避け、世界レベルのテーマのみに専念する様にした。ところがおかしな事に、それは却って地元との関係の深まりを招いた。それは単純なレベルではあるが、先ずマカンレスの知名度を高め、旅行者を招き寄せた。そして地域経済に確固とした地位を占める様になった（勿論、巨大企業のそれには遠く及ぶものではないが）。又、CAT の多くの職員は施設外に居住し、奉仕活動、仕事、自治会、地方議会、娯楽、夜間学級と言った事を通じて地域と関わりを持つ様になった。

*1 GWLAD! GWLAD! ウェールズ国歌の一節。直訳は大地、国。

しかし、他の側面もある。即ちここは誇りと悲しみの歴史を持つウェールズなのである。1491年、Owain Glyndwr^{*1}がマカンレスを僅か数週間首都と定めた頃まで、ウェールズは完全な独立国であったが、イングランドの王朝は周辺諸国を次々と征服し、ウェールズもその巨大な力に併呑されたのである。

ウェールズ人はイングランドにまとまって住まう様になり、イングランド人もウェールズに移住した。イングランドにとっては幸運な事に、ウェールズの人口は200万に止まり、ウェールズ語を母語とする人は僅か50万人に過ぎない。

その結果、ウェールズ独自の言語や文化は新たな移住者によって徐々に淘汰される事となった。CATもこの事と全く無関係ではない。イングランド人を主とする職員達はウェールズ語を学び、中にはかなり本格的に取り組んでいる者もいる。又、彼等の子弟はウェールズ語で教育を受け、二重の文化的背景を持ち、親と共にウェールズ人である事に誇りを見出さんとしている。

しかし、我々はこちらにあって世界的、地球的な問題に取り組んでいるのである。ウェールズの伝統文化や言語の為にどれ程の手間をかけられようか。地元住民を優先的に雇用する事に具体的な利点はあるのだろうか。職員はウェールズ語に堪能である必要があるのだろうか。全ての表示や文書にウェールズ語を併記するべきなのだろうか。我々は揃ってウェールズ語を学ばねばならないのか。そしてこの問題も、動物愛護、直接行動、平等主義、反核と言った事柄と同列に取り扱うべきなのだろうか。

結論として、我々は、英語を国際共通語として用いながら、全ブリテンそして国際社会の叡智を結集して、サステナビリティと言う世界的なテーマに取り組んで行く所存である。但し、我々の故郷はあくまでもウェールズである。

Growing to Live エコダイエット

30年前には悲観論者たちが、1980年代までに広範囲な飢饉に襲われると予言していたが、今では信じ難い話である。それどころか今日の工業化社会では、農民は豊作貧乏に陥る始末である。スーパーマーケットには圧倒的な量の食物が溢れ、しかも安い。

しかし、そこには隠れた対価がある。即ち、この豊かさは世界各地からの輸入に頼っており、第三世界の国家や社会の様々な負担が伴っているのである。それは自然の再生の速度を上回る速さの表土の喪失であり、自然環境そのものを剥ぎ取る様なものである。長期的な視野に立てば、殊に近未来の全世界の人口を考えれば、それは到底続けられる事ではない。

1970年代の self-sufficiency 運動は、これに対する一つの答えであり、その考え方は、集中を排し、地域毎にその地域の条件下で有機農法によって食糧を確保しよう、と言うものであった。CATでもこれに取り組んだが、土地の生産力を詳細に計算した結果、生活して行けるだけの収穫は到底得られない事が解った。そして既に多くの人が確認している通り、この試みは成功しなかった。

CATの場合では、敷地と周辺の気候が農耕にはあまり適しておらず、僅かな収穫の為に莫大な労力を投じる事となった。又、食生活は極端に季節の影響を受け、冬は肉と根菜のみとなり、菜食主義の者は輸入ものの米とレンズ豆ばかりを食べ、その横では子供たちがフィッシュフィンガーと煮込料理を欲しがってハンストを決行する有様であった。そして全員が「我々はなぜこんな事をするのか、これを未来の姿として一般社会に提唱できる筈はない」と自問自答したのだった。

都市の人々は、たとえ庭を持っていて食糧を自給しようとしても必要量の一部しか作れないし、そもそもその様な事をやろうとする人は殆どいな

*1 ウェールズの独立を目指して戦った最後の人物。但し、他の複数の文献によれば、1400年代初頭に活躍した人物であり、1491年と言う時期（原文の通り）は誤りと思われる。

いだろう。結局、「持続的安定的な食糧供給」の為の努力は何か別な次元で行う事になる。有機農法作物の選択、食肉消費の節制、地元産物の選択、物流経路の短縮、加工の簡易化、過剰包装の廃止、などである。これが我々、そして多くの人が考える「エコダイエット」の発想であり、消費生活者にとってはより健康的で、自然環境への悪影響が少ない行動様式である。

CAT では、見学者向けに自然食レストランを開く事により、又、研修コースを通じて、「エコダイエット」の浸透を図っている。全ての食材はセンター内で作られた、新鮮で、可能な限り有機農法によったものである。

施設内の庭園を、我々は冗談半分に「超有機の園」と呼んでいる。ここでは、英国政府が有機肥料と指定し、土壌協会^{*1}が認可したものをすら使っていない、それどころか一切の化学物質を使っていない。20年の経験から、庭園の維持には、化学物質は全く必要ない事が確認されている。我々は残飯やその他の有機物を全て肥料とし、生命サイクルに取り込んでいるのである。

Back to the Soil

直線構造から円形構造へ

現在主流の工業文明に付きまとう根本的問題は、それが直線構造であり、円形構造ではないと言う点である。ある所で資源を採取すると、それをシステムに乗せて消費し、別な場所で自然環境の中に投棄する事を繰り返しているからである。対照的に、自然界は全てが見事に連鎖して輪廻転生を繰り返しており、かつ持続的である。これに近い円形構造を世の中のスタンダードにする事がCATの目標であり、生物学的な面ではかなり成功している。

実際に我々は、生ゴミは先ず最初に分別し、そ

の上で種類に応じた処理をするのが最も合理的である事を体得した。上質の茶葉と同じで、ブレンドは、素材（生ゴミの再生物）が出来上がってから必要に応じて行えば良い。

庭園から出る通常のゴミ、雑草、刈り取った草葉は、麦藁、ちり紙、尿と混ぜて、ミミズとバクテリアの力を借りて肥料とする。しかし台所の生ゴミは、直接バクテリアに処理させるには荷が重いので、豚や家禽に与える。バクテリアは、我々が肉や卵を食するのと同じ様に、花壇や肥えた土壌を好むのである。また、木片、木の葉、板切れなどの変化しにくい物は別途処理する。人の排泄物も別扱いである。

CATの施設は公共下水には一切接続していないので排泄物の取り扱いにいつも苦労させられている。最初は乾燥バケツ式のトイレで、オガ屑を撒いて汚物を覆い、水分を吸収させていた。但し、これは職員用で、見学客用には通常の水洗便所を設け、タンクに貯留していた。バケツ式をオルタナティブテクノロジーとして提唱するのは時期尚早と判断したのである。乾燥バケツ式で溜めた排泄物を肥料にするのは容易だったが、逆にタンクに溜めたドロドロの尿尿を処理するのはかなり辛い仕事で、一般社会では受け入れ難いものであった。

我々が最も欲しているのは、全ての廃水を清水と肥料に変じさせる技術である。80年代の初め、我々は汚水浄化への水生植物の利用について情報収集を開始し、大きな効果を上げた。この方法はドイツで開発されたが、効率と安定性に問題があったのを、我々が実用化した。これは5年間に渡って実験を繰り返した上で、生物学と設計技術の融合に成功した結果である。この方法は葦が最も有用だったので、「葦のベッド」と呼ばれた。効果的で、粗雑な条件でも良く機能し、エネルギーを必要としない。

他にも参考とし、実現したい生物学的技術がある。カナダの生物学者ジョントッドの「リビング

*1 the Soil Association

マシン」^{*1}は、70年代に創設者 Gerard Morgan-Grenville にも影響を与えたものである。又、デビッドベラミーが開発した「バイオコイル」^{*2}は、汚水を浄化するのみならず、燃料に変えてしまうと言う。

今日の問題に満ちた世界では固形のゴミの 40% が有機物であり、汚水中のヘドロが水関連産業の頭痛の種である。そして口に出すのさえ憚られる物質が我々の岸辺を侵し続けている。同時に、地表面から消えつつある土の大地は有機物の為に悲鳴を上げ、広大な穀倉地帯は他の土地で園芸家の肥料にされる為に掘り返されている。この様な問題の全てに対する答えが、直線構造から円形構造への発想の転換なのである。

Better than School

学校では教えられない事

子供に学ぶ事の目的を尋ねたとして、「正しい情報収集力と判断力を身に付けた、成熟した市民社会の一員となる為」などと答える者はいるまい。彼等は揃って「より良い職を得る為」と答える筈である。80年代にはそれが当然で、悪い答えではなかった。しかし、これが本当に正しいのだろうか。技術の変転は激しく、知識や技術はすぐに陳腐化してしまう。職業のあり方も昔とは異なったものになるのではないだろうか。

社会評論家は、遠くない将来に終身雇用制の正社員は少数派になると予測している。多くの人々は複数の仕事を組み合わせて人生を送る事になるだろう。そこで得るのは、現金収入かも知れないし、地方政府内で通用する信用通貨かも知れない。或いは役務の交換と言う形かも知れないし、何か営利とは無関係なものである可能性もある。いず

れにしても「一流企業への就職」と言う古典的な価値観は人生に於てあまり意味のあるものではなくなる。では、終身雇用制ではない、高収入一辺倒ではない部分に於てどのような知識と技術が必要になるのだろうか。

学校で教授される古典的学科と言うのは独善的なものである。大半はお仕着せの教養であり、実際に役立つものではない。勿論、三つの R^{*3} は重要である。しかし、真に役立つものは、例えばボーイスカウトやガールスカウトが修得する様な、救急法、料理、修理・営繕、交通安全、地図読解、公衆衛生などである。確かに、今日ではエンジンの点火プラグ、電気コンセント、オムツの取扱いなども、必要に応じて学校の教科に加えられている。しかし、わざわざ遠回りをする必要はない。家庭科やエネルギー管理や育児をこそ学校で教え、フランス語や歴史は選択科目にすれば良いのではないだろうか。

CAT が提供する教育プログラムでは、このようなギャップを埋め、環境に関する知識を高めるべく配慮しており、これを体験的に修得できるようになっている。それは、肥料作り、固形ゴミのリサイクル、地域的エネルギー効率、住宅建築・修理、自然食料理（食材を無駄にしない料理）、果実や野菜の栽培、と言ったサステナブルな社会に必要な、生きる技に密接したものばかりである。

これらは様々な形で教授されており、大学の科目として認定されるものもあるし、教育指導要領に沿ったものもある。いずれも広範な環境教育の一部を構成するものであるが、今や環境教育に於ては、単なる環境についての講義ではなく、あらゆる分野の基本原則を解説する為の例題として環境を取り上げている事に注目すべきであろう。

勿論、一般向けの教育プログラムもある。知識や技能の修得を別にしても、宿泊コースは特に貴重な体験である。風景と静寂と食事と仲間達との交流、そして降る雨さえ貴重な経験なのである。

*1 John Todd "Living Machines"

*2 David Bellamy "Biocoil"

*3 three Rs 学校教育の基本科目を指す。reading, writing, arithmetic (読み書き算盤)。

CAT の環境教育の中で最も独特なものは「エコキャビン」であり、教育プログラムの要素を凝集した存在である。エコキャビンは、小さな住居に 24 ボルトの自家発電機、薪による暖房、水、調理器具、廃水処理装置を備えたものである。各々の設備の取扱いについては教育プログラムで教授されるが、実際にその場に身を置いてみると、少しでも失敗があれば直ちに全体の機能が乱れてしまう事を思い知らされる。ここでの体験は、誰にとっても忘れる事のできないものとなっている様である。

Straw, Stick and Brick
藁、丸太、煉瓦

建築物は人間や他の生物の環境に深刻な影響を及ぼすものである。国全体のエネルギーの 60 パーセントは建築物に於て消費される。また、多くの土地を占有するし、好ましくない有害物質を生成し、残留させる。我々は殆どの時間を建築物の中、或いはそれらの間で過ごす、そこに心を和ませ、健康を守り、環境を保護する配慮があるとは言えない。同じ地球環境の問題なのになぜなのだろうか。なぜ我々は建築物により多くの関心を寄せないのだろうか。

CAT ではあらゆる行動に思想を反映させようとしており、サステナブルな「エコビルディング」の追求過程そのものが建築分野に於ける我々の実績である。

CAT 開設当初は、まともに雨露を凌げる建物無く、とにかくその建設が急務だった。その様な段階から始まって、様々な興味深い建物が出来上がった。

最初の居住用の建物は、古い石造りの小屋を更新したものだった。展示物の一つである「省エネルギー住宅」はその流れを汲んだもので、ロックウールを 45 センチ厚で充填した壁と四重ガラスの窓を持つこの家は、今日でも英国で最も遮蔽性に優れた建物である。

数年を経て、環境に配慮した小さな田園都市が形成された。そこには丸太や麦藁を用いた屋根に芝を生やした家もあれば、金属とガラスとプラスチックで出来たドーム状の未来的な建物まで揃っている。また、我々は杭や枕木としても耐えられる鉄筋コンクリートも扱っている。

建物自体のみならず、我々は設計にも新境地を開いている。例えば居住者が一人の場合、常に家の中のどこか一カ所だけに人がいるわけで、屋内全体を暖房するのは非合理的である。同時に、英国の一般的な気候の下では、降雨への対策は必須だが、サンルームなら暖房が無くても年間の 8 ヶ月は過ごせるし、4 ヶ月から 6 ヶ月は適当な衣服で屋外で過ごす事もできる。この発想は、コンパクトな三間取りの住宅として具現化した。この家は先ず遮蔽性を高めてあり、暖房のある居間に続いて、南側の開口部にサンルームを設け、曇りガラスの日除けのあるベランダに出入りできる様になっている。

CAT の建築教習の中で最も特徴的なものは、Walter Segal が開発した木製セルフビルド住宅である。我々が Segal の方式に注目したのは、彼自身と同じ理由、則ち、家を自分で建てる事が決して無理でない事は自身が証明したし、多くの人々にそれを修得し実現して欲しいと言う目的からである。

我々はこの組立式住宅に大いに肩入れした。それは、先ず我々のエネルギー利用に関する知見を高める為であり、また木製部材の使用そのものが潜在的恒常的省エネルギーだからである。更に、それが地元で生産されたあまり工業的な加工をしていない素材であれば、環境保護の観点からも極めて好ましいからである。実際に、最近の我々の建築物は、他の同規模の物に比べて、わずか 10 パーセントのエネルギーしか消費しない。

最近では、我々は建築物が居住者の健康に及ぼす影響にも関心を持っており、塗装、仕上、構造、家具などの品質について研究を開始している。また、自然景観の重要性についても大いに注目している。

これらの全てを統合する事によって、我々の水準は、防音等の規準への適合、そして真にサステ

ーナブルな建築の実現に着々と近付いている。

Ways of Building

CATの建築作業

建築には、発注者、設計者、施工者と言う分担があるが、CATの建築作業では、これらが融合している。そしてこの独特のやり方は、器械設計、敷地内開拓と言った他の作業にも適用されている。

この方法によって、労働の成果というものが、共同作業の結果であり、同時に各個人の個性の発現の結果でもある、と言う状況をもたらしている。機能を極めようとする創造力と、自然に適合したエコノウハウとの合一は、建築の分野に於ける Rod James と Pat Borer の偉大な遺産である。

幾人かの職員が大工の修行をし、多くの者が建築作業に協力し、何年もかかってようやくプロの域に到達し、我が家を建てる事が出来た。この達成感こそ無上の喜びであり、我々は、年に何度か開催するセルフビルド研修コースを通じて、多くの人々にその喜びを伝達している。このコースに参加して来る人々は、概ね自分の力で家を建てる事を重大に捉え、同時にプロの技と言うものに畏怖を感じているものだが、わずか2～3日の研修の後には自信と技能を身に付け、このコースの有効性の証人となってしまう。又、彼等は、特に力を要する作業をグループで力を合わせて完遂する事も学び、数日の内に研修と言うよりはお祭り騒ぎの様な雰囲気になってしまふ。

古来より建築作業の世界は男尊女卑の権化の様なもので、専ら男性のみが携わって来たが、最近では様変わりして女性が数多く活躍している。CATの建物の中で最大でかつ最も手間を要した水力ケーブルカー上駅の建設に当たったチームは大半が女性で構成されており、男性のメンバーは喜びに満ち溢れていたものである。対照的に、他の一般的な建築作業では祭りの様な気分はなく、問題が発生すれば全員でその責任を負い、淡々と解決して行く。

ところで、我々は自らの建築の方法を時として「脳天気場当たり主義」とも称している。ここまでの話では、開発や建築について、監督当局も寛大であった様に見えるが、70年代には仮の住まいとして敷地内に設けていたテント村を巡って問題が生じていた。我々はテント二張の許可を得ていたが、実際にはスレート屑の窪みの中にそれを遥かに上回る数のテントを設営していた。当局の監督者は、それらが一般の人の目に触れなければやむを得ないと言う姿勢を示したので、ありがたい沙汰ではあったものの、我々はテントをカムフラージュする必要に迫られた。困みに言えばテントと言うのは、遮蔽が不完全で、冷たいすきま風が通り抜け、薄汚く、見栄えの悪いものである。答えは、ある日ある商人が屋外の絶縁や防水に使うウレタンフォームの売り込みにやって来た時に突然見つかった。御丁寧にも彼等はウレタン素材と取扱い器具を試供用に置いて帰ってしまったのである。早速全てのテントはまだ買い取ってもいないウレタンフォームで全体が6インチ厚に覆われる事となった。窓や扉も周囲の壁と共にウレタンで覆い、後でその部分だけナイフで切れ目を入れるだけである。あっと言う間にテントはすきま風のない快適な個室に変身した。最後にウレタンの表面を周りのスレートに合わせて岩石風に塗装すれば、見事に周囲の景観に溶け込み、「ランドスケープー丁上がり」なのであった。

Putting on a Show / Showing How

展示を通じて何を訴えるか

世界を変えるにはどうすれば良いだろう。ペンは剣よりも強いとは言っても、馬の耳に念仏の喩えもある。結局、念仏の勉強も、馬の言葉の勉強も両方しなくてはならないのである。

最近の環境運動はかつてない程に勢いを増しているが、依然として興味のない大多数の人々からは「だからどうした」と言う目で見られ勝ちである。CATはこの問いに答える為に存在している。

もし一幅の絵が千の言葉に勝る説得力を持つなら、実物に見て触れる経験は千幅の絵に相当しよう。

ではここで、実物とは何か。CAT の本来の戦略目標は、安定持続的なコミュニティの実用的なモデルの創造と、それを実現する為の技術開発であり、一般に公開する為のものではなかった。しかし見学者が増加し、その対応に追われると言う予想外の問題が発生した。彼等は仕事の邪魔をした上、全く間違った知識を勝手に身に付けて帰って行くのだった。このセンターの条件下で出来る事が、他の条件下でも容易に実現すると言うものではない。又、物珍しい部分にのみ注目し、原則的なものを見落とししたりするのだった。

CAT のありのままの実態と展示行為とは、どう見ても相容れない事に思われた。このジレンマは我々の過去最大の課題であり、今も議論が続いている。ある者は我々のみで実験を更に進めて行くべきだと言い、ある者はそれは狭量な考えであり、より広い世界に対して教育・展示を行うべきだと主張する。そしてこれを解決する代わりに、我々は両方ともやめる事にした。その結果センター施設では、実際に機能している機材、教育玩具的な展示物、作りかけの訳の分からない表示、などが奇妙に混在する事となった。

しかしそれらは本当にうまく機能しているだろうか。それを知る為に、CAT の入場券は見学者が感想を記入するスペースの付いた大きなサイズで、その部分を回収出来る様にしている。ある見学者は、「何だか惨めな感じ、支離滅裂、雑然としている、8 歳の息子だけが楽しんでいた、そしてコーヒーがまずい」と言う意見を残した。一体この見学者はつまらない一日を過ごす為にわざわざここにやって来たのだろうか。そして同じ回答の束から、「最高だ、十分な計画と行き届いた配慮に感服した、コーヒーも旨かった」と言う意見も見出された。

満足した見学者もいた様だが、依然として根本的な問題を自覚せざるを得ない。即ち、サステナビリティと言うものがどうしても展示出来ないものである。設計や工作は比較的簡単である。しかし、庭園や生物学的技術は、所定の条件を与えねばならず、観察すべき変化が微小なので展示が難しく

なる。社会的な事柄、即ち組織体制や全体としての機能を分かり易く見せる事となるとかなり困難であり、"alternative"と言うテーマに付きまとう弱点である。更に、こう言った一見異なる各技術分野がどの様に関係し合っているかを説明するのも至難の業である。また CAT の展示には物質的なものの否定と言う一面もあるが、これが消費者に、工業製品や商業取引制度などに対する歪んだ偏見や反感を植え付けてしまう懸念もある。

我々は今後も生の現実を見せて行くべきだろうか。少数の人に深い影響を与えて行くべきか、より大多数の人に少しの影響を与えて行くべきだろうか。展示の為に展示でも良いのか、それとも展示を通じて人々に具体的な価値観を植え付ける様に仕組むべきか。それで誤解を生じはしないだろうか。解説は詳しい方が良いのか、簡単な方が良いのか…。依然として議論が続いている。

Managing Chaos

混沌の運営体制

緑の運動は、自然や生物に関わる点で他の社会運動とは異なる。しかし、世の中の事と決して無関係ではられない。

その一つがデモクラシー、即ち、組織体や国や惑星の構成員が利害を共有し、全体の意志決定に参画し、責任を全うすると言う制度である。この意味で、デモクラシーはサステナブルな未来社会の根幹を成すものである。しかし、生産効率と言うものも、デモクラシーとは相容れない部分が多いながら、社会の重要な課題である。そもそも、CAT の技術とは、最小限の資源消費で必要を満たすと言う、生産効率の向上の為に存在しており、我々の仕組みもそれを前提としている。デモクラシーと生産効率の均衡は古来からの政治の課題であり、常に油断無くバランスを取りながら、最終的に双方が健全に実現されなければならない。どちらに偏っても深刻な事態を招くものである。

CAT の意志決定手続は、この均衡を維持しよ

うとして、弥次郎兵衛^{やじろべえ}の如く変遷して来た。開設当初は超民主主義とでも呼ぶべき状態で、単なる反権力志向に止まらず、正式な意志決定統は全く無かった。取り敢えずそこに居合わせた者が適当に物事を決める様な所があり、最善の議案は、主流を占める者達の人生論や宇宙観を含めた議論の中から何となく固まったものである。それは全く無意味な混沌と言うわけではなかったが、時間ばかりかかりながら全く不安定で、車輪の品質は毎週毎週ほんの僅かずつ向上したが、それが空回りしている事には変わりはなかった。

この経験は、如何なる決定事項でもそれなりに無視できない影響が生じるものであり、輕拳妄動を慎まねばならないと言う教訓を残した。いずれの組織や集団に於ても、拘束力のある意志決定には正当な手続と相応な厳肅さが必要である。

そして 1975 年、Rod James が所長となり、理事としての強力な権限を背景にして、意志決定手続を制式化した。人事等の繊細な事柄は選挙された会議が取扱う事となり、他に週毎の全体会議が開かれる様になったのである。

1979 年から 1986 年の Pete Raine の時代には、最高決定権は全ての正規職員による議会と週毎の全体会議に戻った。しかし、大半の事柄は各部門に委ねられ、この部門が経営収支上の独立単位となったのである。

この方法は Pete が CAT を去った時にその強さを発揮したのだった。18 ヶ月に渡って所長が空席になったのだが、日常の業務は全く停滞せずに済んだのである。これを機に自己管理の意識が高まったわけだが、ただ依然として会議にやたらと時間をかけると言う問題があった。

Roger Kelly が所長となって、意志決定手続の変遷はようやく集大成された。90 年代には正規職員の全体会議は 2 週間毎となり、更に 1 ヶ月毎となった。部門横断的な事項は選挙された 4 人と所長から成る経営会議が取り扱う。正規職員が最高意志決定機関である全体会の構成員となり、拒否権も行使できる。緊急の重要事項については無記名投票を行うが、大半の事項は、やはり全体の雰囲気の中で決まる事が多い。因みに、無記名投票が行われたのは二回だけである。

現在のこの方法は、デモクラシーと生産効率と
言う対立する課題に対して、優美なまでに均衡を
もたらしめている。ここに辿り着くまでに 20 年を
要したが、国会の先生方にもこの過程の復習を奨
めたいものである。

Slicing the Cake

収益と分配

人が仕事で失敗をすれば、当然賃金は得られない。しかし、仕事をする目的が金銭であろうと、より崇高なものであろうと、様々な支払いはなくてはならないし、負債を返済しなくてはならない。CAT の金銭との関わりは、これよりも更に複雑なものである。他の"alternative"を志向する組織や団体と同じく、我々は金銭的、物質的な贅沢を嫌悪していたし、特定の場合を除いては、長い間そう言ったものとは無縁であった。

しかし残念ながら、現実社会は我々を平和な状態に放置しておいてはくれず、結局我々も収支計算に配慮せざるを得なくなった。そこには二つの視点がある。一つは、収益を上げる事であり、如何に展示し、如何に職員の生活を潤すかである。言うなればケーキを作る事に当たる。もう一つは、ケーキをどの様に切り分けるか、即ち、収益をどの様に職員に分配するか、組織の維持管理にどの様に収益を割り当てるかである。

これは、特に職員自らが経営に当たる組織では常にホットな課題である。なぜなら、そういった組織では、職員達は同時に経営側（常に組織の経済力の充実を目指す）であり、労働者側（常に個人の賃金の上昇を目指す）でもあるからである。もし我々が、先の例で言うケーキを個々人で山分けにしてしまえば、組織が崩壊の憂き目に会い、全員が職を失うのは明らかである。しかし、職員への賃金が少な過ぎれば、彼等（そして彼等の家族達）の生活は困難になろうし、意欲も、労働の質も低下し、就職志願者も減少するに違いない。

CAT 開設当初は、殆どの関係者はボランティ

アとして働いており、生活は各々の蓄えに頼っていた。数年して、主要職員には若干の報酬が支払われる様になり、70年代の終わりには、生活保証を原則とした給与体系が完成していた。即ち、子供や住宅ローンを持つ者により多くの金額が与えられていた。

80年代は、賃金はインフレにも勝る勢いで上昇し、平等な賃金体系の必要性が予見される様になった。ここで深刻な議論が勃発したのである。家族や負債を持つ者は、生活形態に応じた生活保証給は、真に必要な事を満たす公平な経済制度だと主張し、これに対して独身者は、余暇を過ごす為の費用も真に必要なものであるとし、独身者の存在は扶養家族の養育よりも必要性が低いと言うのか、と反駁した。それは、人の主張が、それぞれの生活事情を反映したものである事を良く知らしめる出来事だった。結局、我々は、最大多数の親和と制度の単純明快化の為に、均等な給与体系を布く事とし、そして現在では議論はなくなった。

我々は収支を合わせる事を学び得た訳だが、依然として、新規のプロジェクトに於ては資金不足に悩まされており、四苦八苦しながら各種の支援に頼っていると言うのが実状である。我々は数年に渡って、ウェールズ観光公社やウェールズ地方開発委員会を通じて中央政府のウェールズ特別予算枠^{*1}に主に頼って来た。篤志賛同者達にも少額の割に意義が大きい事をアピールし、様々な助力を仰いで来た。また、大きなプロジェクトを推進する為に、政府の職業訓練制度の一翼を担って人材を確保したり、IVS ボランティア^{*2}にも頼って来た。我々は各種の公益基金などに頼って来たが、主な展示物はこの様な複合的な資金確保によって完成して来たのである。1988年からはエコキャピンの時間貸しを開始し、それによって設備を充実した。1991年には大型開発計画の予算として、債券によって100万ポンドを確保する事ができた。又、1994年には、新しい教育施設整備の名

目で、EUより40%の援助を受ける事となり、後援者の負担を僅かに軽減できた。そして1995年、所要額の半分を確保した所で新たな建設を開始する事ができた。今、我々には自信がある。

Changing Gear / Up a Gear

ギアチェンジ

CATは、未熟な実験生活共同体から、何回かの飛躍の時を経て、プロフェッショナルな教育・研修団体へと発展を遂げた。その飛躍の中の最大のもを指して我々は「ギアチェンジ」と呼んでいる。それを契機に我々の組織のあり方は、経営面、理論面双方に於て決定的に変貌したのである。

90年代の現実を認識し、時代に即して我々が内に蓄えた知見を広く世に問おうとするまでには長い道のりがあった。職員達は、発展とプロ化について常に議論して来たが、一方には、仲間内だけで「スモールイズビューティフル」を堅持する方が気楽だし、有意義だとする反対意見があった。本質的な変化は少数の反対で押し止められ、全体の決定は概ね保守的なものばかりだった。

この状況に変化をもたらしたのは、1987年にやって来た新しい所長 Roger Kelly だった。彼は長い時間を費やして資料に目を通し、この組織の目的を再検討した。そして、CATがその目的を達成する為には改革が不可欠であると言う結論に達したのである。

Roger Kelly は小賢しい MBA^{*3} でもなければ、途上国援助然とした技術屋でもない。緑の運動に献身して来た、ただ高い理想を持った指導者であり、また、若い頃にはイエズス会の修道士にもならんとした人物である。彼の誠意ある説得を我々

*1 Welsh Quangos - The Wales Tourist Board and the Development Board for Rural Wales

*2 IVS International Voluntary Service

*3 MBA 経営学修士

は真摯に受け止めたのだった。

そして我々には二つの課題が与えられた。則ち、系統立った開発計画の策定と経営基盤の安定である。経営面では、金融機関の助言を得て株式会社化を達成し、債券も発行する様になった。これは、この種の団体では、以前には全く考えられなかった事である。債券を発行する為には、投資家達を納得させ得る趣意書が必要であり、その為には採算性のある詳細な計画が必要である。

この計画作りが、見学客へのサービスに関する重要な事柄を浮かび上がらせた。CAT の展示用の敷地は 2 ヘクタールに及ぶスレート層の台地だが、当時、見学客は駐車場からそこまで急なゴツゴツした坂道を 300 メートルも歩かなければならなかったのである。ここに、シャトルバスかケーブルカーか、何か便利で快適な手段を用意する必要が痛感されたのである。

その答えは、リントン^{*1} にピクトリア時代からあるケーブルカーを参考にして得る事になった。それは二台の車両が回転ドラムを介して結ばれ、一方が降れば他方が昇る点は他と同じである。しかし、リントンの物は電動モーターは使わず、車両にタンクを備え、上側の車両が下側の車両より重くなるまで川から引き込んだ水を満たすと言うもので、シンプルかつエレガントで、エネルギーを循環利用できるのである。

一度水力ケーブルカーの敷設が決まると、それに伴って色々な事が実行に移された。駅舎を建てれば、それは受付窓口、トイレ、売店、展示コーナー、事務室などとしても機能する事となる。上駅の近くに貯水池を造る事になれば、それも水辺の景観を創造する機会となった。まだ公表できない展示計画も数多くある。

それらは巧く行っただろうか。起債は大成功で、僅か 2 ~ 3 ヶ月の間に百万ポンド単位の資金を集める事ができた。まだ実現していないものについて言えば、我々にとっては英仏海峡トンネルにも等しい位置付けで、時間も資金もかかる。趣意

書に盛り込んだ全てが完成したわけではないが、概ね成功しているのは事実で、100 点満点の 80 点を得ていると自負している。

Reaching Out

情報発信基地としての活動

80 年代始めのある日、アメリカ人の団体旅行客がやって来た。旅行業者が CAT を古城や古民家と同じ様な観光地と思い込んだものらしい。水力ケーブルカーが出来るずっと以前の事であり、その団体客はドロドロの道をえっちらおっちらと登り、挙げ句、そこに見た光景に唖然となったのだった。女性までもがツナギ服を着ており、その横で子供達が駆け回り、そのまた横に雨ざらしのポンコツ車…。青ざめた顔の御婦人曰く「まるでヒッピーの巣窟」であり、一同右に同じく恐れおののいて早々に退散して行ったのだった。

今日では、我々もより良い接遇に心掛けているが、しかし、より多くの人々に向かって情報発信を試みるなら、今ある施設のみが最良の媒体ではないのである。自ら選んで CAT を訪れた人の数は百万を遙かに上回るが、所詮少数派と言えよう。それに我々が真に訴えたい事は、展示物の背後に脈打つ根本理念や知識であり、実は形や場所を変えて、今の展示以外の方法でも伝えられる筈のものである。

我々の成果を、センター施設内のみならず、より広く深く活かす為に、我々は、情報、出版、コンサルタント、通信販売、オルタナティブ技術協会などの対外普及サービス^{*2}を創始した。

情報サービスに於ては、書面及び電話での問い合わせや相談に殆ど無料で回答している。問い合わせの内容は極めて多岐に渡り、担当者には豊富な知識と理解力が求められる。しかし、十数種類

*1 Lynton 英国南東部デボン州のリゾート地

*2 'outreach' services

程の質問が全体の 90 パーセントを占める事が解っている、基本的な回答の手引きを作成して使用している。一方、高度な内容の質問の為には、参考文献と問い合わせ先を網羅した「情報源リスト」を作成し、特定の課題に沿って調べ物をする時の強力な手助けとなっている。勿論、センターの売店で扱っている図書の中にも関連する情報が豊富に含まれており、ここでの通信販売も outreach サービスの一翼を担う重要な業務である。

ところで我々は、最も多い問い合わせが、目的の本が見つからない、或いは、あったのに絶版になってしまったと言う相談である事に気付いた。これこそが満たされるべき需要であり、我々の印刷媒体である「CAT 出版情報」に期待されている役割と言うものだろう。これを通じて CAT の出版物のみならず、豊富な文献の中から目的の物を探し出し、通信販売で容易に入手できるのである。

outreach サービスの中で一際光彩を放つのがコンサルタント業務であり、その範囲は隣近所の庭木の手入れのアドバイスから、果ては多国籍企業や大学との共同作業にまで及んでいる。確かにコンサルタント業務は成長著しい分野であるが、実は、この仕事が高く評価されるという事は、我々が思い描く新しい世界のあり方とは矛盾するのである。則ち、自治体等が、手間を惜しみ、多額の予算を費やしてコンサルタント業者に仕事を任せる事の是非である。しかし、おかしな事ではあるが、この業務を通じて我々は実社会の仕組みを垣間見る機会を得ているのである。

オルタナティブ技術協会は、CAT 及びその活動に賛同する人達の集まりである。多くは CAT でのボランティアや研修参加経験者だが、全世界から参加を得ている。会員は季刊"Clean Slate"を通じて絆を保っている。

Evolution

この20年の発展

緑の運動の背景にある思想は 60 年代から 70 年代に登場したが、90 年代の今日では、広く浸透し、社会への影響力も増している。しかし、緑のバイブルの様なものがあるわけではなく、環境運動の王道があるわけでもない。CAT は CAT なりの試行錯誤を繰り返して来た。この紆余曲折は、この種の運動全体の傾向とも言える。ここで、この 20 年の変化を振り返ってみよう。

当初は終末を目前にした悲壮感の様なものがあつたが、緑の変革は数十年単位で成し遂げるものと悟った。既に地上から多くの種が失われ、遅きに失しているかも知れないが、我々は大局的な視点を持ち続けている。

我々は単純で優美な道具や方法を好む。しかし最近では、工業製品や先端技術を頭ごなしに否定しなくなった。それを利用する事が最終的に最も妥当であるなら受け入れる様になっている。

我々は農村社会に閉じ籠もりたいとは思わない。ここにも現代生活があるし、それは必要な事である。

労力や機材は集中・共用した方が効率が良く適用範囲も広い。従って、常に「スモールイズビューティフル」が正しいとは限らない。

集中、過密の解消は良い事だが、地域社会までが完全に分散するのは、現代のライフスタイルにとって良い方法ではない。都市は一里塚の様に点在すべきである。

我々は、社会の主流に対してそれ程変わり者ではなくなった。現実社会の文物を適宜認知して取り入れる方が、全てをやり直すより効率が良い。時に革命が必要な事もあるが、革命と同時に混乱も生じるものである。

環境に良いと言う事があらゆる意志決定の根拠だったが、それは時として重大な誤りを招く。今では我々は同一の場所で進歩を遂げる為に、統計や分析などの活用に関心をもち、同じ作物なら他よりも良い物を作ってい

る。

我々は、美辞麗句で飾らないありのままの姿を見せる事が正しく事実を伝える方法だと思っていたが、それは最善ではなかった。思想はコミュニケーションによって伝達され、又日々更新されるべきものである。その為には、プロの手を借りた現代的情報媒体の利用が必要である。

内部の文化的状況については、全体的には、依然フーテン生活を志向する気味があるが、一方でドレスアップする事も楽しんでいる。又、我々は互いの専門領域を尊重する様になり、何事にもやたらと全員で取り組んだり、細かい事で議論を繰り返す様な事はしなくなった。各自の職務遂行には相互信頼が醸成され、相互扶助の共同体構造が出来上がりつつある。

皮肉な言い方をすれば、これらの事は最初から結果が見えていたと言う事になろう。現実にはもっと厳しいものだと言われよう。しかし、あるグループが失敗しても、"alternative"の仲間が更に続々と育ちつつある事を我々は知っている。

The Spawn
CATの子孫達

80 年代の終わり、CAT の将来についての議論は、センター施設内の開拓続行に決した。しかし、外部でベンチャー企業を設立するという様な別な手段も理論的にはあり得ないわけではない。それは、Gerard Morgan-Grenville が 1980 年にブリストルに設立した、CAT とは姉妹関係にある UCAT^{*1} が用いている方法である。UCAT では、全てを小さな帝国にまとめ込むのではなく、採算

的に独立できる業務は独立させており、書店、自然食カフェ、建設企業体、エネルギー節約コンサルタント、展示施設などが誕生している。それに比して CAT では全てを一箇所に集める事を好んでいるが、元職員が地元で企業を興した例は幾つかある。

自転車の貸し出しと修理を行っている "Joyrides" の創業者 Martin Ashby は今も CAT の評議員である。環境教育雑誌として名高い "Green Teacher" は、CAT の教育部門に勤務していた Damian Randle が創刊したものである。しかし、CAT から分岐した流れで最も脚光を浴びているのは所謂ハイテクコテージである。これは Bob Todd の専門技術の成果であり、彼は CAT の電気分野に大きな貢献を果たした人物である。

1978 年、センター内に準独立の形で電子機器を扱う企業体を設立する事になった。その為に電子分野専攻で休暇年度中の大学講師 Mike McPhun が招聘された。彼はセンターで活躍した後、大学には戻らず、1 マイル程の所で有機食品販売の仕事を始めた。彼の心を捕らえたのは半導体ではなく人参であったらしい。当の電子機器企業体は、センターの敷地に沿って流れる川の名を取り、「Duras 電子設計」と名付けられ、採算は難しいと予想されたにも拘わらず、大きく成長を遂げている。数ある製品の内、最も画期的な物は溶液中の生存細胞数を検測する装置である。これは試作品が出来上がっただけで、新会社の立ち上げが計画される程に大きな可能性を持ったものであった。しかし、この計画に専念しようとする、全員で食事当番や掃除当番を務め、ワイワイガヤガヤと「ねえボブ、ここのハンダ付けやってくれない？」などとやっている CAT の組織が少々煩わしくなるものである。そして、「Aber インストゥルメンツ」がアベリスティス^{*2} の科学工業団地に設立されたのである。2 ~ 3 年後には Dulas 電子設計の方もマカンレス近郊の廃校を手に入れて独立した。実は、CAT の中にいる間は収益を

*1 the Urban Centre for Appropriate Technology 都市型適正化技術センター

*2 Averystwyth マカンレス (CAT の所在地) から南西へ 25 キロの都市。アベリストゥイス。

上げる事もなかったのだが、独立した途端に採算性が確立したのである。これこそが規制撤廃・自己責任原則導入・競争原理導入の効果なのだろうか。しかし、この新会社でも依然として CAT 風に全員で事に当たる方式が好まれている様である。

最近 CAT から分流して行ったのは、二人の優秀なエンジニアが設立した「Ecogen 社」で、その名は広く知れ渡っている。

ここに紹介した彼等とはいずれも良好な関係を保っている。彼等同士の間でヘッドハントを仕掛け合う様な事があるうとも、この友好関係に変わりはない。

Into Tomorrow 未来に向けて

古い考え方では、未来とは現在とは異なるものとされていた。1920 年代より、人々が「未来」と言うと、それは科学技術の総合的発展を意味していた。幾何学的デザイン、人工素材、機械とロボットによる完全制御、ピカピカ光る服を着た人々が空飛ぶ自動車で忙しく出勤する風景、木や鳥に乱される事のない整然として透明な世界、高速性と清潔性を至上とする無菌空間…。

古い環境学者達はその様な未来像を否定して来た。未来は如何にあるべきかを語る機会を与えられたなら、彼等は正反対の意見を述べる事だろう。豊かな自然に恵まれた田園風景、動物達、素朴な天然素材、麦藁帽子にチョッキ姿の笑顔の自作農、唐黍を満載した荷車…。

真の未来はこのどちらでもなく、双方のエッセンスが混在している。確かに未来の科学技術は、現在想像するより遙かに高度であるに違いない。一方、同時に、緑の思想家達が思い描く理想も、

より基本的な所で実現している筈である。都市も村も山野も、サステナブルな世界の基盤となるのである。

エコシティとは、平和な田園生活を保証するものである。そこでは機械よりもリビングシステムが標準となり、そこには自然への畏敬がある。自動車の為に整備された街路ではなく、コンピューター、自転車、木こそがエコシティの象徴である。

我々は既にエコシティとサステナブルな文明の造り方を知っている。ではなぜ実現しないのか。古典的資本家は左派に押されてはいても過去にない勢いで活躍している。彼等とてこの惑星を汚染しようと言う悪意があるわけではなく、単に盲目的な力で突き進んでいるのである。その力とは "MORE"、即ち「より多く、より豊かに」と言うただ一つの欲望である。

70 年代に「成長の限界」を著したメンバーは、その後の研究成果から、90 年代に入って彼等のコンピューターモデルを修正した。結果は同じである。MORE 方式の機械文明が続けば恐ろしい事態を免れない。しかし、我々が既に獲得した知恵を以て新しい価値観を定着させれば全世界の安定と持続が可能であり、まだ手遅れではない。

緑の運動の目的は "MORE" の盲信をやめさせる事だが、我々は全ての人の賛同が得られた時にのみしか行動し得ない。人々の理解と協調が世論を形作る。我々はアジェンダ 21 の精神に則り、それを広めて行かねばならない。

CAT の様な組織には辛い宿命がつきまとう。"MORE" に代わる価値観を具体的に創り出さねばならないのである。我々はこの灯火を絶やしてはならない。最後には、ある日突然ベルリンの壁が消滅した時と同じ様な光景が見られる事を信じたい。ある日突然、全ての人々が "MORE" の理想が幻影であった事に気付き、真に望むものは "BETTER" である事を悟るのである。

Peter Harper とオルタナティブテクノロジー

Comment on the Back Cover: Peter Harper and Alternative Technology

1972 年、Peter Harper は、自然との共生を指す用語として「オルタナティブテクノロジー (Aoternative Technology)」を提唱した。

それから時を経ずして、中部ウェールズのある採石場跡に若い活動家達が集まり、根拠地を開設した。彼等の目的は、自然破壊を伴わない生活スタイルとその為の技術を開発し、自ら実験する事だった。

こうしてオルタナティブテクノロジーセンター (The Centre for Alternative Technology) は、展示及び教育研修施設として世界的に知られる事となった。と言うよりも、この拠点に集ったのべ数百人の仲間達が何年にも渡って繰り広げた汗まみれの努力と泣き笑いの物語で知られていると言った

方が正しいかも知れない。

先駆者達はやがて現実の社会に適応する術をも身に付け、1980 年代を通じて CAT の活動は成熟し、社会への影響力を徐々に増した。彼等の思想や行動は、以前は前衛的と言われたものだが、今日では社会に取り入れられ、実践されているのである。

この冊子は、彼等の物語を、彼等自身の言葉と貴重な写真や資料で伝えるものである。

1983 年には Peter Harper 自身も CAT に移り住み、内部から活動に関わる様になり、緑の運動に影響を与えて来た。彼は、今も CAT の活動と未来を見つめ続けている。

*1 この解説文は原典裏表紙に印刷されており、題名は訳者の判断により付与した。

原著作権者 (C)1995
THE CENTRE FOR ALTERNATIVE TECHNOLOGY
CANOLFAN Y DECHNOLEG AMGEN

The Centre for Alternative Technology は独自の展示施設であり、地球環境との関係に於てより適正な生活形態を社会に提示する事を企図している。ここで行われる有機及び再生可能エネルギーに関する展示（中学生以上対象）、コンサルタント業務、情報提供活動は、貴重な啓示となるであろう。

著作権保有
財団法人 国際AI財団

著作権保有
内村 雅生

この翻訳文書は、MIDAS 東京会議'96 に於ける配付資料とする事を目的として、原著作権者の了解を得て財団法人国際AI財団が暫定試訳版を作成した。その後、同財団で暫定試訳版の作成を担当した内村雅生が翻訳を継続し完成版を作成した。

200202